

## 「UCDAアワード2012」初の投資信託部門

# 評価基準の考え方紹介が最大の成果

## 品質保証としてUCDA認証の広がり期待

### UCDA 副理事長・事務局長 八杉淳一氏

帳票やパンフレット、ウェブページなどをデザインの視点で評価する「UCDAアワード」を主催する一般社団法人ユニバーサルコミュニケーションデザイン協会(理事長：福田泰弘、以下UCDA)は5月31日、「UCDAアワード2012」(特別協賛：トッパン・フォームズ(株)特別協力：(株)電通)の選考結果を発表した。生命保険では東京海上日動あんしん生命、損害保険では三井住友海上火災保険、新たに加わった投資信託では大和投資信託委託、OTC医薬品では武田薬品工業がアワードに輝いた。今回、アワードに投資信託を加えた意義などについてUCDA副理事長・事務局長の八杉淳一氏に聞いた。

同アワードは今年で3回目。今回は、「生活者を守るデザイン」をテーマに生損保をはじめ投資信託、OTC医薬品を対象を拡大、対象物も医療保険のパンフレットとウェブページ、自動車保険のパンフレットとウェブページ、外国債券投資信託の販売用資料、総合感冒薬のパッケージとして開催した。

投資信託については、既に数社がファンドの運用成績を評価するアワードを行っているが、投資信託の募集パンフレットを、情報のわかりやすさという視点から評価するのは、これまでにないものだ。「UCDAアワード2012」は大和投資信託委託が受賞したほか、「情報のわかりやすさ賞」は三菱UFJ投信、「情報の充実度賞」は日興アセットマネジメントと野村アセットマネジメント、「特別賞」は新光投信と大和住銀投信投資顧問が受賞した。

投資信託の募集パンフレット部門の評価は、DC9ヒューリスティック評価法による情報のわかりやすさ評価と4項目からなる情報の充実度評価、そして、生活者の声を分析する組織「アナザーボイス」の評価によって行われた。

「今回、投資信託業界の多くの方々と知り合い、評価基準の考え方を紹介できたことが最大の成果」と語るのは、UCDA副理事長・事務局



評議会の様子

長の八杉淳一氏。「説明に伺った多くの企業から協力をいただいた。皆さんの『第三者による客観的な評価』への期待の大きさにも驚いた。評価を通じて文字のサイズや情報の量、グラフの使い方など共通の課題も見てきた。アワードに協力していただいた企業には本当に感謝したい」と話している。これまで一般投資家にとって、とかく投信商品の内容の難しさが指摘されてきたが、デザインという新しい視点からの評価で投信業界が新たなステージに進むことが期待されているといえる。

ユニバーサルデザインとして、多様な生活者にとって、使

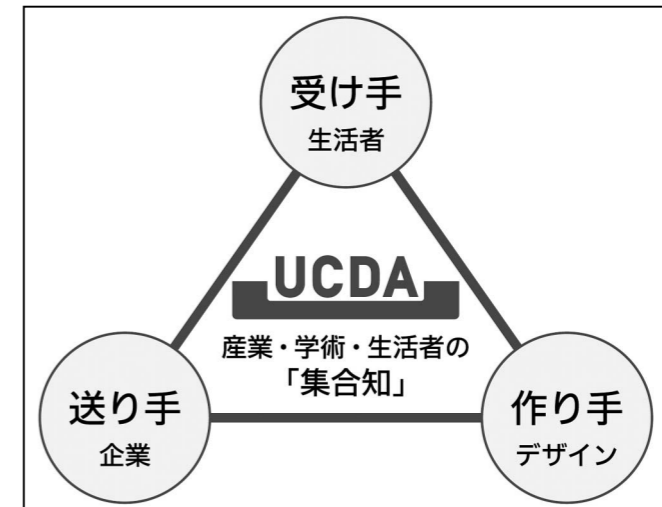


八杉淳一氏

いやすい製品を開発するという思想が定着しつつある。情報コミュニケーションにも、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れて「見やすく、わかりやすく、伝わりやすい」コミュニケーションの実現を目指したい——UCDAはこの考え方を「ユニバーサルコミュニケーションデザイン」と名付け、普及・啓発活動を行っている。

UCDAでは、産業・学術・生活者から構成された会員が情報の送り手・作り手・受け手の異なる立場から重層的に議論することにより、最適なコミュニケーションのデザインを追求している。そこにはどちらか一方の都合に偏らないフェアな視点が重要だ。UCDAは産業・学術・生活者の集合知による客観的な評価基準を用いることで、この課題に取り組み、情報のコミュニケーションを誰にとってもわかりやすく改善するための指標を提示していく。その評価基準を一般に広く知らしめるきっかけ作りの役割を担っているのが「UCDAアワード」といえるようだ。

これまで情報提供に関しては送り手・作り手から受け手に一方的に流れ、受け手にとってのわかりやすさが軽視されがちだった。そこには「デ



ザインの視点が抜け落ちていた」と八杉氏。第1回のアワードから参加してきた保険業界は、既に改善に向け地道な取り組みを続け、その成果が出始めている。「わかりやすさ」への改善成果を表明する「UCDA認証」を取得する企業も増えているという。

一方、今回から対象となった投信会社のアワードへの感想はどうか。「アワードを通じてこれほどまで内容を分析しているとは思わなかった。これからの改善に役立つ」と、「第三者機関の評価には励みになる」などの意見が多数上がっているという。

また、消費者団体からは「読みたくなるデザインが必要」という意見もあった。

もっとも、現在の評価基準が絶対というわけではない。「時代の変化や生活環境の変化などに合わせ、送

り手・作り手・受け手の三者が議論を尽くして、その真ん中に基準を作ることが大切」(八杉氏)。「UCDAアワード」を通じてのさまざまな議論は重要な意味を持ってくるわけだ。その中で「生活者の受容性への配慮」は、大きなテ

マの1つだ。情報にはわかりやすさと充実度のバランスが必要だが、両者のバランスを取ることは容易ではない。「あれもこれも入れるのではなく、情報の優先度をつけて整理する必要がある。すべてが重要なわけではない。生活者が受け取れる情報量はどのくらいか適切なのか、いくつかの軸が出てきている。それが今回の最大の発見」と八杉氏。

投資信託の販売用資料における評価基準について議論を深めるため、多くの企業とテーブルにつくことができたことが、今回のアワードの最も大きな成果といえるかもしれない。その議論を踏まえ、共通化できるものは共通化して、各社が同じルールで生活者と向き合えるようになることが目標と、八杉氏。今後投資信託業界でも、「わかりやすさ」の品質保証として、UCDA認証が広がっていくことに期待している。(T)

UCDAアワード2012受賞社 (投資信託部門)	
UCDAアワード2012	
・投資信託外国債券投資信託	大和証券投資信託委託株式会社
情報のわかりやすさ賞	
・投資信託外国債券投資信託	三菱UFJ投信株式会社
情報の充実度賞	
・投資信託外国債券投資信託	日興アセットマネジメント株式会社
	野村アセットマネジメント株式会社
特別賞	
・投資信託外国債券投資信託	新光投信株式会社(アナザーボイス)
	大和住銀投信投資顧問株式会社